（研究論文）

# 『バイエルピアノ教則本 op.101』における指使いとその変遷

多田　純一 *

要約

日本で最も親しまれているピアノ導入期のための教則本である『バイエルピアノ教則本 op.101』は、1880年、L.W. メーソンによって日本にもたらされた。その後、日本では多くの出版社から様々な版が出版されてきた。それぞれの版を見ると、指使いに違いが見られる練習曲がある。本論では、『バイエル』の初版と、現在出版されている『バイエル』の指使いについて違いが見られる箇所と変遷を明らかにし、日本で出版されている『バイエル』の指使いについて考察した。

考察により、原著に対して後に出版された版では多くの指使いが追加されていることがわかった。特にペータース版から多くの影響を受けている。さらに、日本人の校訂者により追加された指使いもあり、それぞれの版で指示されている指使いは、練習曲の課題だけでなく、音楽観にも深く関わっている。学習者とピアノ教師は、教則本だからという理由で指使いを選択するのではなく、その音型と自らの手や指に応じた指使いを選択しなければならない。

キーワード：ピアノ、指使い、バイエル、作品101、初版

2008年9月26日受理（理論）

## 1. はじめに

日本で最も親しまれているピアノ導入期のための教則本は、言うまでもなくフェルディナンド・バイエル Ferdinand Beyer(1803-1863) によって作曲され、編集された『バイエルピアノ教則本 op.101』[1]（以下、『バイエル』と呼ぶ）である。『バイエル』は1851年頃、マインツの Schott 社から出版された。その約30年後にあたる1880年、L.W. メーソン[2]によって日本にはじめてもたらされ、音楽取調掛のピアノ教育における教材として使用された。これをきっかけとして『バイエル』は日本のピアノ教育において必須の教則本となる。はじめて日本でピアノ教育を受けたピアニストやピアノ教師が教える側の立場となった時、自らが学んだ教材を弟子のレッスンに用いたことは自然の成り行きであったと考えられる。その後、日本では多くの出版社から、数々の『バイエル』が出版されており、現在も種類は増え続けている。

『バイエル』は教材として使用される頻度が高いこともあり、研究も様々になされてきたが、そのいずれも作品分析や、課題の分類、もしくはピアノ教師の経験による各練習のアドバイスのようなものに終始している。作品分析では森山・岸・横山による研究[3]は非常に詳細なものであり、これ以上に作品分析する必要はないと思われる。しかしながら、多くの研究において、原著は確認されずに研究されてきた。校訂版ではなく原著に従って作品分析すると、また違った結論になるのではないか、と筆者は考えている。楽譜を構成する要素は様々であるが、本論では指使いについて考察する。音程や音価、その他の記号（スラーやタイなど）と違い、ペダリングや指使いは演奏者にまかされる部分が多い。そのため、例えばショパン作曲《Etude》では約20冊もの版において指使いに違いが見られる[4]。『バイエル』においても複数の版を見比べてみると、教則本でありながらも、いくつかの曲において指使い

* 大阪健康福祉短期大学
連絡先：多田純一
〒590 - 0014　堺市堺区田出井町2-8
大阪健康福祉短期大学　子ども福祉学科
E-mail: op.23.60@samba.ocn.ne.jp

に違いが見られる。本論の目的は『バイエル』の原著と、現在出版されている『バイエル』の指使いについて違いが見られる箇所と変遷を明らかにし、日本で出版されている『バイエル』の指使いについて考察することである。

## 2.『バイエル』のエディション

### 2.1 『バイエル』の原著とは

冒頭で述べたように、『バイエル』は1851年頃にマインツのSchott社から出版された。出版年代が明確でない理由は、現代と違い当時の楽譜には出版年代が記されておらず、その代わりにプレートナンバー[5]が記されていた習慣によっている。少なくとも1851年頃と推定できたのは、1829年から1947年まで音楽出版物に関する最新情報が掲載されていたHofmeisterの月刊カタログのファクシミリが、Royal Holloway, University of Londonが管理するホームページ[6]によって確認することができたからである。'Beyer'と'op.101'で検索すると4件あり、そのうち2件が1851年の1月に掲載されたものでSchott社から出版された版の紹介である。残りの2件は、1894年に掲載されたブラオンシュヴァイクのLitolff社から出版された版と1895年に掲載されたライプツィヒのPeters社から出版された版であり、この2冊はバイエルの死後に出版されたものである。はじめてアメリカで出版された楽譜はニューヨークのFirth Pond & Co社から出版された'Method for the Piano Forte'（本論では未確認）で、1851年に出版されている。これらの事から、『バイエル』は1851年、もしくは直前に出版されたと考えるのが自然である。

続いて本論で比較考察に使用する楽譜について、その概要を述べる。1851年1月のHofmeister月刊カタログのファクシミリを確認すると、紹介されている2冊の『バイエル』は両方ともマインツのSchott社から出版されたものでありながら、金額が少し違って紹介されている。1冊は「3Fl.36Xr」と記載され、もう1冊には「3Fl.12Xr」と記載されている。この時代のドイツの通貨について調べると、バッハやベートーヴェンの作品を出版した他の出版社の多くは「Ngr（ニューグロッシェン）」で価格を表示している。しかしすでにウィーンやライプツィヒ、ブリュッセル、パリ、ロンドンなどに支店を持っていたSchott社は、その流通の関係からか「Ngr」で価格表示をしていない。当時ウィーンにて流通していた通貨を用いている。「Fl」は「フローリン」と呼ばれた通貨、「Xr」は恐らく「Kr」、「クロイツァー」と呼ばれていた通貨の誤記かと思われる。2冊のうち「3Fl.36Xr」と紹介されている版のタイトルが、筆者所蔵の'École Préliminaire de Piano'[7]と一致しており、また金額も「3Fl.36Kr」と表示されているので、カタログで紹介されている版そのもの、もしくはその何刷目かであると考えられる。この版はタイトルがフランス語になっており、序文やその他の解説はすべて左側にドイツ語、右側にフランス語で掲載されている。本論ではこの版を原著として考察に使用する。

Hofmeisterのカタログには掲載されていないが、Schott社からロンドンで出版された版がある。1854年に出版されたこの版は、タイトルが'Elementary Instruction Book For The Pianoforte'（本論ではThe British Library所蔵、請求番号h.1028の複写資料を使用した）と英訳されており、序文、解説などすべてが英語となっている。この版には校訂者としてFerdinand Praegerの名前が記されているが、バイエル存命中に原著と同じSchott社から出版されているので、バイエル自身がその内容を確認できたと考えられる。ただし指使いの指番号については事情が異なっている。原著では、現在使用されている指番号である、親指を第1指とし、小指に向かって順番に「12345」の数字がふられているが、Praeger校訂の版では旧式の指番号が使用されている。旧式の指番号とは、親指を「＋」、人差し指「1」とし、親指から小指に向かって「＋1234」の数字がふられている[8]。

続いて、1880年にメーソンが日本に紹介し、音楽取調掛にて使用された楽譜であるが、この版は先に紹介したニューヨークで最初に出版されたものではなく、ボストンにてCarl Prüfer社から出版されたものである。タイトルはロンドンで出版された版と同じく'Elementary Instruction Book For The Pianoforte'本論では東京芸術大学所蔵、請求番号C24/11の複写資料を使用した）となっている。英語版ではあるが、校訂者の名前は書かれておらず、また正確な出版年も明らかではない[9]。

Hofmeisterのカタログで紹介された4冊の中で、現在、図書館での複写や古書ではなく、通常の流通経路で購入できるのはPeters社の版のみである。しかしながら、バイエルの死後に他の出版社から出版さ

れ、さらにAdolf Ruthardt校訂となっているため、内容に違いが生じている可能性があると考えられる。'Urtext'という記載も楽譜には見られない。タイトルは'Vorschule im Klavierspiel'[10]となっている。

これらのことから、本論では1851年頃出版された原著に対し、1854年ロンドンにて出版されたPraeger校訂版（以下Ⅰ.Praeger版と呼ぶ）をその補助的な資料として用いる。また1880年にメーソンが日本に紹介した版（以下Ⅱ.Carl Prüfer版と呼ぶ）と、1895年にPeters社から出版されたRuthardt校訂版（以下Ⅲ.Peters版と呼ぶ[11]）を、原典版ではなく校訂版として比較対象のひとつに含む。

### 2.2 日本で出版されている『バイエル』

1880年、メーソンによって日本のピアノ教育に用いられた『バイエル』は、その後様々な広がりを見せる。日本で最初に出版された『バイエル』は音楽取調掛で学んだ奥好義によるもので、1890年に出版されている。本論で入手する事ができた日本の楽譜では、Ⅲ.Peters版以前に出版された唯一の版である。高橋によると、この奥によって出版された版は大正時代まで30年以上使用されたということである。その後、海外から洋書としての楽譜が輸入されはじめ、同時に1910年頃、東京音楽学校で学んだ萩原英一や高折宮次らによって次々と出版されはじめた。それらの版について高橋は次のように述べている。

昭和三十年頃まではこのような推移である。日本の出版活動は徐々に活発になっていくが、萩原・高折編とともにペータース社の復刻である楽譜が横行していた。しかしバイエルそのものは依然として華やかではあるものの、少しずつ変化が現れ始めた。子供向けに五線を大きくし、カットを配し、さらにカラーで美しく印刷され音楽絵本とみまがう「子供のバイエル」の発刊となる。これは欧米にはみられない日本独自の出版物である。[12]

上記の引用はいくつかの重要な事情を説明している。日本で出版された多くの『バイエル』が、Ⅲ.Peters版を踏襲もしくは参考にして出版されたということ。さらに、現在『バイエル』の主流となっている全音楽譜出版社の版や『子供のバイエル』はⅢ.Peters版の復刻版が出版された後に出版された楽譜であるということ。そして『子供のバイエル』は日本独自の出版物である、ということである。

現在では『バイエル』はまさに多様化している。大人向けの「標準版」と題されたものもあれば、『リカちゃんバイエル』や『こどものバイエル　ミッキーといっしょ』など、キャラクター名をタイトルに含む『バイエル』もある。高橋によると1989年時点では25種類[13]、近藤によると1995年時点では40種類[14]だったということであるが、現在はさらに増え続けている。本論では指使いの変遷を比較考察するために、対象とする版を選出した。まず1890年から1945年までに日本で出版された版は出来る限り収集した。続いて1945年以降に出版されたものに関しては現在絶版となっている新興音楽出版社の版と、現在主要な出版社である、全音楽譜出版社、音楽之友社、ドレミ楽譜出版社、カワイ出版の各社の大人向けの翻訳版、そして各社の子供向けの版である。キャラクター名を含んだものや、内容に大幅な変更があるものは対象外とした。

1890年から1945年までに日本で出版された版で本論の比較対象に含む楽譜は以下の通りである。本論での略名、編者名、出版年、題名、出版社の順に記す。加えて国立国会図書館所蔵の資料には請求記号を記した。本論ではその複写資料を使用している。特に記載のないものはすべて筆者所蔵である。

①奥版、奥好義編、1890年、『洋琴教則本』、寛裕社、国立国会図書館所蔵、請求記号YDM72818（マイクロフィッシュ）②萩原版、萩原英一編、1924年、『バイエルピアノ教則本』、共益商社書店、国立国会図書館所蔵、請求記号YD5-H-特270-31（マイクロフィッシュ）③高折・平田版、高折宮次・平田義宗編、1928年、『バイエル新教則本』、ピアノ専門學院④乙骨版、乙骨三郎訳、1935年、『バイエルピアノ教則本』、シンキヤウ社、国立国会図書館所蔵、請求記号674-29⑤園田版、園田清秀著、1936年、『新しいバイエル』、婦人之友社、国立国会図書館所蔵、請求記号429-17

続いて1946年以降に出版され、翻訳された形式を持つ版は以下の通りである。

⑥全音版A、全音樂譜出版社編輯部編著、1948年、『バイエルピアノ教則本』、全音楽譜出版社、国立国会図書館所蔵、請求記号YM11-H2986⑦新興版、（編者名記載なし）、1949年、『バイエルピアノ教則本』、新興音楽出版社⑧音友版、（編者名記載なし）、1954年、『新訂バイエルピアノ教則本』、音楽之友社⑨全音版

B、全音出版部、1955年、『標準バイエルピアノ教則本』、全音楽譜出版社⑩全音版C、全音出版部、1955年、『全訳バイエルピアノ教則本』、全音楽譜出版社⑪木村版、木村ケイ編、1964年、『指づかいつきバイエルピアノ教本』、全音楽譜出版社⑫寺西版、寺西昭子校訂、1980年、『バイエル・ピアノ教則本』、カワイ出版⑬伊藤版、伊藤康英編集、2006年、『バイエルピアノ教則本New Edition』、音楽之友社⑭平尾版、平尾妙子訳・校訂、2007年、『標準版バイエル・ピアノ教則本』、ドレミ楽譜出版社

各出版社による子供向けの版は以下の通りである。

⑮全音子供版、全音出版部、1957年、『子供のバイエル』(上・下)、全音楽譜出版社⑯音友子供版、(編者名なし)、1967年、『新版こどものバイエル』(上・下)、音楽之友社⑰カワイ子供版、カワイ出版編、1975年、『こどものバイエル』(上・下)、カワイ出版⑱ドレミ子供版、ドレミ楽譜出版社編集部、1987年、『標準版こどものバイエル』(上・下)、ドレミ楽譜出版社

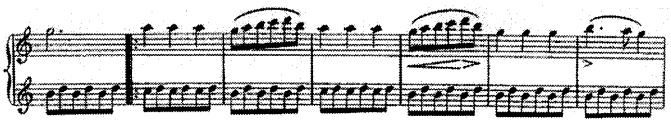
これまでに紹介した、原著、原著以降海外で出版された3冊、日本国内で出版された18冊の合計22冊において、指使いに多様性が見られる練習曲の変遷と特徴を次項において考察する。

## 3. 指使いの変遷

### 3.1 補足的に追加された指使い

『バイエル』の原著ではNo.1の練習に入る前にバイエルによる序文が書かれており、その後「ピアノのための基礎」として楽譜や音程、音符と休符、拍子記号と臨時記号が説明され、6オクターヴの鍵盤と楽譜が書かれている[15]。その後、「右手の指のための打鍵練習」、「左手の指のための打鍵練習」、「両手で一緒に弾く練習」がそれぞれ24曲ずつ提示され、続いてNo.1として「3手」の12曲が提示されている。「3手」とは、先生が「2手」、生徒が「1手」の連弾のことである。原著とバイエルの死後に出版されたⅢ.Peters版を見比べると、このNo.1の時点ですでに指使いの追加が見られる。12曲のうち、Vol.1とVol.12以外の10曲には原著には書かれていない数字が書かれている。それは、バイエルが一度指示した指使いを省略する傾向があり、そのことを補っていると思われる追加の仕方である。例えばVol.1では、C、D、E、F、E、D音を二分音符で2回ずつ打鍵し、最後は全音符のC音で終止する。バイエルは、この最初の上行するC音からF音に第1指から第4指を指示するが、下行する場合には省略している。そして同じC音からはじまるVol.2では、最初のC音には第1指は指示されておらず、また8小節の曲全体に指使いが見られない。完全に指使いが省略されている。こういった場合、Ⅲ.Peters版では第1小節目や、後半部分のはじまりの音、最後の数小節において指使いが追加されている。バイエルが指使いを省略する意味は、指使いの数字に頼らず音符を見て練習する事を重視したことや、生徒自身が次にどの指で弾くべきかを考えられる楽譜にしたことなどが考えられるが、楽譜上にバイエル自身の本意は述べられていないので推測することしか出来ない。しかしながら、これらの場合にⅢ.Peters版で追加される指使いは決して考えられないような指使いではなく、すべての音は5度音程内であり、自然に指が置かれるポジションに対して指使いが補足的に追加されていると言える。このような単純な追加はNo.1-Vol.2,Vol.3,Vol.4,Vol.5,Vol.6,Vol.7,Vol.8,Vol.9,Vol.10,Vol.11、No.2-Vol.1,Vol.3,Vol.4,Vol.5,Vol.7,Vol.8、No.21、No.26、No.31、No.32、No.34、No.35、No.62、No.64、No.74、No.76、No.77、No.78、No.80、No.81、N0.84、No.88、No.92、No.93、No.95、No.96、No.98、No.99、No.100、に見られる。至る所に追加されていると言ってよい。また逆に、わずかながら原著では指示されている指使いが省略されて曲もある。No.39の第8小節目、右手のD音、No.62の第17小節目、左手のG音にそれぞれ第5指が指示されているが、Ⅲ.Peters版では省略されている。これまでに示した指使いの補足的な追加の端的な例をNo.64に見ることが出来るので、ここでその指使いの変遷を考察したい。

譜例1　原著 p.35 No.64　第8小節目から第14小節目



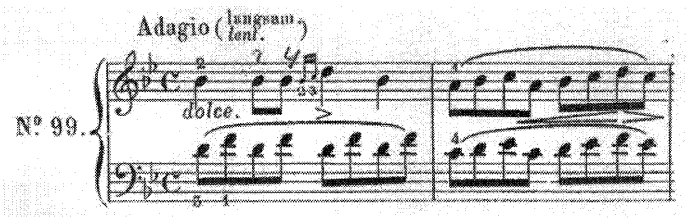
第9小節目から第12小節目までは曲全体の中間部、第13小節目から第15小節目は冒頭の再現部である。No.63までは、右手はほぼ5度音程内で弾けるようになっており、左手もⅣやⅤ、もしくは$V_7$の和音で6度、もしくはオクターヴの移動がある程度で、指使いに工夫が必要な練習曲はない。No.64も同じ音程で弾ける

練習曲であるが、同じ音を反復させる音型が冒頭から出てくるところがそれまでの練習曲と違う特徴を持っている。原著には指の置きかえの練習について助言などは書かれていないが、寺西は⑫寺西版において「同音の反復による指かえの練習」[16]というサブタイトルを付けている。

| 表1 | No.64 第9小節目から第15小節目、右手の指使い | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 原著 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅰ.Praeger版 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅱ.Carl Prüfer版 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅲ.Peters版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ①奥版 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ②萩原版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ③高折・平田版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ④乙骨版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑤園田版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑥全音版A | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑦新興版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑧音友版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑨全音版B | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑩全音版C | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑪木村版 | 2 | 3 | 2 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 2 | 3 | 2 |
| ⑫寺西版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑬伊藤版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑭平尾版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑮全音子供版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑯音友子供版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | | | | 1 | 2 | 1 | | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑰カワイ子供版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |
| ⑱ドレミ子供版 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 3 | | | 2 | 3 | 2 |

表1からわかるように、原著、Ⅰ.Praeger版、Ⅱ.Carl Prüfer版共に、指使いが指示されていない。これは冒頭部分において指の置き換えが指示されているので省略されていると考えられる。しかしⅢ.Peters版では指の置き換えすべてに指使いが指示され、Ⅲ.Peters版以前に出版された①奥版を除くすべての版においてⅢ.Peters版と同じ指使いが指示されている。先に引用した高橋の言葉である「ペータース社の復刻」とは、この事を意味している。⑪木村版はタイトルが示す通り、すべての音符に指使いが指示されているので、他の版とは若干意味合いが異なるのだが、それでも18冊中、実に14冊がⅢ.Peters版と全く同じ指使いであり、子供用のうち⑮全音子供版と⑯音友子供版2冊は若干の省略があるものの、ほぼ同じ指使いである。このように、原著、Ⅰ.Praeger版、Ⅱ.Carl Prüfer版では指示されていない指使いがⅢ.Peters版では指示され、Ⅲ.Peters版以前に出版された①奥版を除くすべての版に明らかに影響を与えるという変遷はNo.99にも同様に見られる。

譜例2　原著 p.53 No.99 第1小節目、第2小節目



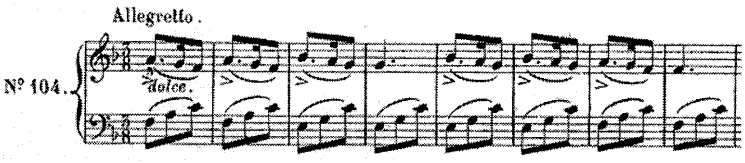

| 表2 | No.99 第1小節目、第2小節目、右手の指使い | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 原著 | 2 | | | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| Ⅰ.Praeger版 | 2 | | | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| Ⅱ.Carl Prüfer版 | 2 | | | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| Ⅲ.Peters版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ①奥版 | 2 | | | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ②萩原版 | 2 | 2 | 3 | | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| ③高折・平田版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ④乙骨版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑤園田版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑥全音版A | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑦新興版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑧音友版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑨全音版B | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑩全音版C | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑪木村版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | 4 | 2 | | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 3 | 4 | 3 | |
| ⑫寺西版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑬伊藤版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑭平尾版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑮全音子供版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑯音友子供版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑰カワイ子供版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |
| ⑱ドレミ子供版 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 3 | | | | 1 | | | | | | | | |

表2から、Ⅲ.Peters版と①奥版を除くすべての版において第1小節目の第2拍目、2つのB音に対する指の置き換えが指示されている。曲のテンポはAdagioであり、また冒頭部分である第1小節目には*dolce.*とも記載されている。第3拍目の装飾音に入る前の2つのB音には第2指と第3指が置き換えられるのは一般的な指使いであり、補足的な指使いの意味を持っていると言える。No.99のこの箇所においても、先に説明したNo.64の場合とほぼ同様の変遷が見られることがわかる。譜例に書き込まれている指使いは、この本を使用して練習した誰かが書き込んだものだと思われる。

### 3.2　考案され、追加された指使い

前節で考察した指使いは、その指使いが指のポジションと前後の音との関係から、最善であると考えられる指使いであった。しかしながら、同じように追加される指使いであっても、いくつかの方法が考えられる音型の場合もある。その例が見られるのがNo.104である。原著の第1小節目から第8小節目では、冒頭のA音に対する第3指しか指示されておらず、Ⅰ.Praeger版、Ⅱ.Carl Prüfer版も同様である。この箇所に対して、Ⅲ.Peters版は5小節7つの音に対して指使いを追加している。

譜例3　原著 p.57 No.104 第1小節目から第8小節目




| 表3 | No.104　第1小節目から第8小節目の右手の指使い | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 原著 | 3 | | | | | | | | |
| Ⅰ.Praeger版 | 3 | | | | | | | | |
| Ⅱ.Carl Prüfer版 | 3 | | | | | | | | |
| Ⅲ.Peters版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ①奥版 | 3 | | | | | | | | |
| ②萩原版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ③高折・平田版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ④乙骨版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑤園田版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑥全音版A | 3 | | | 4 3 2 | | 4 | | 3 2 1 | 1 |
| ⑦新興版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑧音友版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑨全音版B | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑩全音版C | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑪木村版 | 3 2 1 | 3 2 1 | | 4 3 2 | 1 | 3 2 1 | 3 2 1 | 2 1 2 | 1 |
| ⑫寺西版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑬伊藤版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑭平尾版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑮全音子供版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑯音友子供版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑰カワイ子供版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |
| ⑱ドレミ子供版 | 3 | | | 4 3 2 | 1 | 3 | | 2 1 2 | 1 |

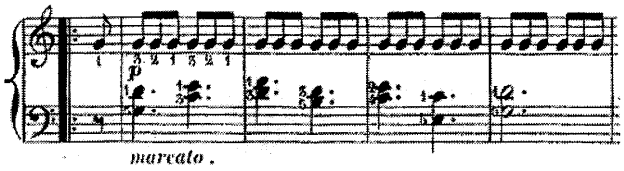
表3からわかるように、変遷そのものはⅢ.Peters版が①奥版を除くすべての版に影響を与えているという意味で前節の2曲と変化はない。第3小節目ではB、A、G音に第4指、第3指、第2指を指示し、第4小節目のG音では第1指に指の置き換えを行っている。この箇所に関しては、この指使いが最も自然な指使いである。しかし、変遷に変化がない事が不自然なのは、第5小節目のB音に第3指が指示されていることである。さらに第7小節目ではA、G、F音に対して第2指、第1指、第2指というように、第2指が第1指を跨ぐ指使いになっている。

まず第5小節目のB音には、第3指の可能性と共に、第4指の可能性も残されている。なぜなら黒鍵ではあるが、その前に全く同じ音型のB、A、G音に対して第4指、第3指、第2指が指示されているからである。第3指でなくてはならない、という訳ではない。この箇所を第3小節目と同様に第4指、第3指、第2指で打鍵すれば、第7小節目のA、G、F音は、第3指、第2指、第1指で弾く事が出来る。そして第8小節目のF音は、そのままの第1指で打鍵する、もしくは第2指に置き換えるという方法があるのである。その次の第9小節目がA音からはじまるので、確かに第8小節目のF音が第1指なのが好ましいという考え方は一理あるのだが、後者の指使いも自然な指使いである。しかしながらこの指使いを指示したのは⑥全音版Aのみであった。同じ全音楽譜出版社でありながら、リニューアル版である⑨全音版B以降に出版された全音版はすべてⅢ.Peters版と同じ指使いに変更されている。では、どうしてバイエルは原著の中で詳細な指使いを指示しなかったのだろうか。筆者の意見では、この場合にも学習者自身によって指使いが考え出されることを目的としていたのではないか、ということである。それ程に指使いが考案される可能性がある音型であることと、106の練習曲がすでに終わりに近づいているからである。曲としても、ほぼソナタ形式に近い形となり、充実した作品である。しかしⅢ.Peters版が考案した指使いが、日本で出版された版の①奥版と⑥全音版A以外のすべての版に引き継がれているということに、この指使いが正しいという共通認識がピアノ教育の場に植え付けられてきたような印象を受ける。とはいえ、日本で出版された版が、すべての練習曲においてⅢ.Peters版の影響を受けている訳ではない。次節では日本人の校訂者によって考案、変更された指使いについて考察する。

### 3.3　日本人の校訂者によって変更された指使い

原著、Ⅰ.Praeger版、Ⅱ.Carl Prüfer版、Ⅲ.Peters版のすべての版で同じ指使いが指示されているにも関わらず、日本で出版された版によって指使いが変更されている練習曲はNo.90とNo.97の2曲である。

譜例4　原著 p.48 No.90 第9小節目から第12小節目




No.90は、第9小節目から第16小節目まで、右手はすべてG音のみの打鍵であり、旋律は左手に移る。このホルン5度の響きを持つ左手の和音に対する指使いがこれまで考察してきた練習曲とは違う変遷を持っている。Ⅲ.Peters版では追加も変更もされていない。しかしながら、②萩原版は原著と同じ指使いを指示しつつも、括弧書きにて独自の指使いを追加し、さらに③高折・平田版では原著の指使いは削除され、②萩原版で追加された指使いと全く同様の指使いのみが指示されている。④乙骨版は、ほぼ②萩原版と同じ指使いを指示しながらも、括弧書きにて原著の指使いを追加している。④乙骨版では第9小節目のG音に対して第

| 表4 | No.90 第9小節目から第12小節目の左手の指使い | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 原著 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| Ⅰ.Praeger版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| Ⅱ.Carl Prüfer版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| Ⅲ.Peters版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ①奥版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ②萩原版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| | ( 2 | | 1 | 2 | 1 | | 1 ) |
| | ( 5 | | 2 | 4 | 3 | | 4 ) |
| ③高折・平田版 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 |
| | 5 | 3 | 2 | 4 | 3 | 5 | 4 |
| ④乙骨版 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 |
| | 3 | 3 | 2 | 4 | 3 | 5 | 4 |
| | ( 1 | | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 ) |
| | ( 5 | | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 ) |
| ⑤園田版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑥全音版A | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 |
| | 5 | 3 | 2 | 4 | 3 | 5 | 4 |
| ⑦新興版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑧音友版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑨全音版B | 1 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 4 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑩全音版C | 1 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 4 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑪木村版 | 1 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 4 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑫寺西版 | 1 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 4 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑬伊藤版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑭平尾版 | 1 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 4 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑮全音子供版 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 |
| | 5 | 3 | 2 | 4 | 3 | 5 | 4 |
| ⑯音友子供版 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 3 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑰カワイ子供版 | 1 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 |
| | 5 | 4 | 3 | 5 | 4 | 5 | 5 |
| ⑱ドレミ子供版 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 |
| | 5 | 3 | 2 | 4 | 3 | 5 | 4 |

3指を指示しているが、5度の音程を第2指と第3指で弾くのは無理ではないにせよ、不自然であるため、恐らく誤植かと思われる。さらに第11小節2拍目のC音には第2指が指示されている。このように、この箇所では幾通りかの指使いが試みられ校訂者達が熟慮した跡が見られるが、興味深いのはこの箇所についていくつかの版において注意書きが見られることである。②萩原版では、教則本の最後に記されている脚注のなかで「下の括弧内の指使ひにして奏してもよし。」[17]と記載されている。③高折・平田版では次のように説明されている。

第九小節目から、中音に四小節宛のMelodieが現はれる。（中略）特に注意すべきは此處に一カ所、一指のホ音（E）からヘ音（F）への同指運指がある。この場合は、ホ音（E）を打つた拇指を少し立てゝ、ずらせるように迅速に且つ圓滑にヘ音（F）を打鍵せよ。[18]

また④乙骨版では次のように説明されている。

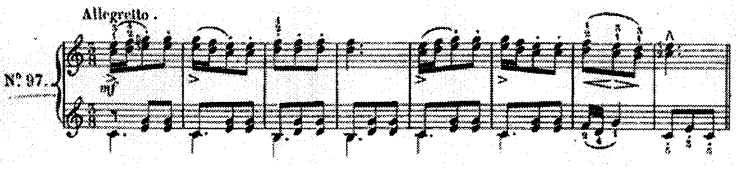
反覆記號より後の八小節間は、中音にMelodieがあわはれる。この部分は、右手は輕快に奏し、左手はMarcatoに奏するのであるが、右手に誘われてStaccatoにならぬやう注意すること。また左手指づかひは( )中のやうにしてもよい。[19]

このふたつの説明には異なるニュアンスがあると言える。③高折・平田版ではマルカートについては一切触れられず、むしろメロディを続けて弾くことを強調している。「ずらせるように迅速に」を額面通りに受け取れば、ほぼレガートと受け取ってもよいような説明である。一方、④乙骨版ではマルカートについては「右手に誘われてStaccatoにならぬやう」という記載から、スタッカートにならない程度に一音一音切って演奏することのように受け取ることができるが、明確ではない。さらにマルカートそのものの意味は言及されていない。後半の指使いに関する説明では、Ⅲ.Peters版の指使いを括弧書きにしただけでなく、「( )中のやうにしてもよい」という言葉で、参考の指使いにしてしまっている。この表現の仕方が②萩原版と同様であることは、偶然にしては出来すぎである。いずれにしても、②萩原版、③高折・平田版、④乙骨版では、どう見てもレガートで弾くための指使いが考案され、指示されている。切って演奏するのか、切らずに演奏するのかでは、音楽観そのものに影響する問題である。

この箇所は原著の指使いを見る限り、一音一音、音を離して演奏されるべきであると考えられる。萩原、高折、平田、乙骨が指示した指使いのようにレガートで弾くための指使いはいくつかの方法があったはずである。しかしながらスラーもかけず、続かない指使いを指示し、マルカートと記載しているということは、やはり離す方が自然なのである。このマルカートの意味に関しては、1946年以降に出版された版では、ほとんどの版において「はっきりと」と追記されている。また⑨全音版Bでは「これはregatoとstaccatoの間くらいに、音を一つずついくぶん切るようなつもりで、はっきりとひく標語です[20]」と説明されている。しかしながら、1946年以降に出版された版でも、⑦新興

版、⑧音友版、⑬伊藤版、⑯音友子供版のみが原著と同じ指使いを指示し、その他の版では第9小節目の第2拍目 C-E 音に第2-4指を指示するという別の方法で、やはり指をつなげていく指使いを指示している。原著と同じ指使いを示す4つの版のうち、3つの版が音楽之友社出版であることは興味深い事実である。また1946年以降に大人向けの版として出版された楽譜には③高折・平田版の指使いが見られなくなるのだが、子供向けの版には用いられているという、少し変わった変遷を持っている。子供向けの版ほどマルカートの正確な説明が必要であり、また小さな手であることから、音をつなげる指使いよりも、むしろ一音一音、離して弾く指使いに変更する必要があるのではないだろうか。続いて No.97について考察する。

譜例5　原著 p.52 No.97 第1小節目から第8小節目



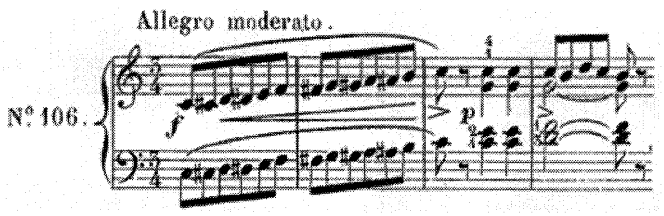

| 表5 | No.97 第8小節目、第9小節目の左手の指使い | | | |
|---|---|---|---|---|
| 原著 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| Ⅰ.Praeger版 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| Ⅱ.Carl Prüfer版 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| Ⅲ.Peters版 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| ①奥版 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| ②萩原版 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| ③高折・平田版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| ④乙骨版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| ⑤園田版 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| ⑥全音版A | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| ⑦新興版 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| ⑧音友版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| ⑨全音版B | ( 5 | 4 ) | | |
| | ( 3 | 2 ) | | |
| | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| ⑩全音版C | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| ⑪木村版 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| | 2 | 1 | 1 | 2 |
| ⑫寺西版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| | ( 4 | 3 ) | | |
| | ( 2 | 1 ) | | |
| ⑬伊藤版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| ⑭平尾版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| ⑮全音子供版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| ⑯音友子供版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| ⑰カワイ子供版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |
| ⑱ドレミ子供版 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | 3 | 2 | 1 | 2 |

No.97は3度の重音のための練習曲であり、初心者にはバランスよく打鍵することが難しい課題のひとつである。しかし冒頭から C-G 音、D-F 音、E-G 音の組み合わせを、それぞれ第1-3指、第2-4指、第3-5指で打鍵するような音型になっているので、それ以外の指使いに変更させることには無理がある。第2小節目ではその下行型であるが、当然ながら第3-5指、第2-4指、第1-3指の順に戻ってくることになり、すべての指を使用しなければならない。それにもかかわらず、第7小節目のスラーがかかった D-F 音、C-E 音、H-D 音に対して、原著では第2-4指、第1-3指、第1-3指の指使いを指示している。C-E 音、H-D 音を第1-3指で2回続けて打鍵するということは、物理的にはレガートすることが出来ない指使いなのである。ここで考えられるのは、第9小節目の H-D 音を第1-3指で打鍵する為、という理由であるが、第8小節の最後の音である C-E 音で手を鍵盤から離すことは可能であるため、わざわざレガートしづらい指使いを選ぶ必要もないのではないだろうか。

この箇所でも指使いに変遷が見られる。原著、Ⅰ.Praeger 版、Ⅱ.Carl Prüfer 版、Ⅲ.Peters 版はすべて同じ指使い、さらに①奥版と共に②萩原版も原著と同様で、No.90とは違い、この練習曲では③高折・平田版から変化している。第7小節目のスラーがかかった D-F 音、C-E 音、H-D 音に対して、第3-5指、第2-4指、第1-3指を指示し、レガートしやすい指使いとなっている。やはりこの指使いが自然であると思われる。ただし、③高折・平田版以降のすべての版が同じように変更しているかというと、そうでもなく、版によって選択された跡がうかがえる。No.90では原著通りであった音楽之友社による版はすべて変更されている。逆に全音楽譜出版社のものは、子供向けの版は変更しているが、4冊ある大人向けの版のうち、⑥全音版 A、⑨全音版 B は変更、⑩全音版 C、⑪木村版では変更前の指使いに戻っている。

### 3.4　日本人の校訂者によって追加された指使い

原著では指使いが指示されておらず、Ⅲ.Peters 版でも追加されていない指使いに、日本で指使いが指示された練習曲もある。それが最後の練習曲である No.106である。




| 表6 | No.106 第1小節目から第3小節第1拍目の右手の指使い | | |
|---|---|---|---|
| 原著 | | | |
| Ⅰ.Praeger版 | | | |
| Ⅱ.Carl Prüfer版 | | | |
| Ⅲ.Peters版 | | | |
| ①奥版 | | | |
| ②萩原版 | 1 3 1 3 1 2 | | |
| ③高折・平田版 | | | |
| ④乙骨版 | | | |
| ⑤園田版 | | | |
| ⑥全音版A | 1 3 1 3 1 2 | 3 1 3 | |
| ⑦新興版 | | | |
| ⑧音友版 | | | |
| ⑨全音版B | 1 3 1 3 1 2 | 3 1 3 | |
| ⑩全音版C | | | |
| ⑪木村版 | 1 3 1 3 1 2 | 3 1 3 1 2 3 | 4 |
| ⑫寺西版 | | | |
| ⑬伊藤版 | | | |
| ⑭平尾版 | | | |
| ⑮全音子供版 | 1 3 1 3 1 2 | 3 1 3 | |
| ⑯音友子供版 | 1 3 1 3 1 2 | | |
| ⑰カワイ子供版 | 1 3 1 3 1 2 | 3 1 3 1 3 1 | 2 |
| ⑱ドレミ子供版 | 1 3 1 3 1 2 | 3 1 3 | |

譜例6　原著 p.59 No.106 第1小節目から第4小節目

原著では、この冒頭部分に関して指使いが指示されていない。その理由として考えられるのは、手の大きさによって指導者が指使いを配慮するべきという考えだったのではないかということである。このNo.106はNo.105と共に、徹底した半音階の練習であり、このNo.105の直前には番外練習が提示されている。はじめに、G音からはじまる1オクターヴの半音階が右手と左手それぞれ指使いの異なる楽譜で示されている。第1指と第2指を交互に弾く方法と、第1指と第3指を交互に弾く方法である。前者には「この指使いは小さな手のために便利である」[21]と説明され、後者には「この指使いは一般的な指使いである」と説明されている。続いてC音からはじまる2オクターヴの半音階が右手と左手が別々に提示されているが、そこには第1指のみが指示され、肝心の第2指、もしくは第3指が記載されていない。この時点で、小さな手のためか、大きな手のためか、という選択をまかせていることがわかる。7曲目は両手の練習で、第1指と第2指が中心となる反行型でD音から1オクターヴの上下行、8曲目はC音から2オクターヴにわたるユニゾンの上行で、第1指と第3指が中心となって指示されている。これらの事から、No.106において指使いが指示されていないのは、小さな指の場合は第1指と第2指を中心に、大きな手の場合には第1指と第3指を中心にして反音階を上行するという選択をするためのものであったと考えられる。この箇所に対して、②萩原版、⑥全音版A、⑨全音版B、⑪木村版と、子供向けの版4冊すべてが第1指と第3指の組合せを指示している。各版ともに、その意味は説明されていないので、どうしてその選択がなされたのかは明確に知ることは出来ない。1946年以降に出版された大人向けの版のうち3冊すべて全音楽譜出版社のものである点と、子供向けの4冊すべてという点が特徴的である。恐らく、『バイエル』修了後に必要になってくる第1指と第3指の組み合わせを、早い時期から身に付けるためではないかと考えられる。子供向けの版では4社とも方針が同じでありながら、どの音まで指示するかについては版によって異なっている。また⑪木村版と⑰カワイ子供版は第3小節第1拍目まですべての音に指使いを指示しているが、最後のAis、H、C音の3つの音の指使いが違っている。

## 4. まとめ

本論の目的は、現在出版されている『バイエル』の指使いについて違いが見られる箇所と変遷を明らかにし、日本で出版されている『バイエル』の指使いについて考察することであった。

考察により、Ⅰ.Praeger版、Ⅱ.Carl Prüfer版、①奥版、で指示された指使いは共に原著と違う箇所はなく、Ⅲ.Peters版で多くの追加が見られることがわかった。単純で補足的な追加に関しては、「3.1　補足的に追加された指使い」で示したように、多数存在する。これらの練習曲は、特に再現部での追加が多く見られた。原著では、最初にテーマが出てきた時には指示された指使いが、たいてい再現部において省略されていることが多いからである。こういった追加は、明らかに学習者にとってわかりやすい楽譜にしようとした意図が感じられる。指使い一覧表からわかった指使いの変遷とその考察により、本論で得た指使いの変遷と、日本で出版されている『バイエル』の指使いの特徴は以下の通りである。

1. 初心者のための教則本である『バイエル』も、ショパン作曲《エチュード》など、芸術的な作品と同じように、校訂者による指使いの追加や変更が見ら

れる。

2. 同じ校訂版でありながら、Ⅱ.Carl Prüfer 版は原著と同じ指使いを指示し、Ⅲ.Peters 版では多くの指使いが追加されている。また指使いの変遷はⅢ.Peters 版からはじまっている。

3. ①奥版の指使いはメーソンが日本に教材として持ち込んだⅡ.Carl Prüfer 版と同じ指使いを指示している。

4. ②萩原版以降に日本で出版された版はⅢ.Peters 版と同じ指使いを指示している場合が多く、明らかに影響を受けている。ただし、それぞれの版が、直接影響を受けているのか、それとも間接的に影響を受けているのかまではわからない。

5. ②萩原版以降に日本で出版された版はⅢ.Peters 版よりも、さらに追加・変更されている練習曲がある。

6. 1890年から1945年に日本で出版された版のいずれかと、すべての曲において全く同じ指使いを示す1946年以降に出版された版はない。またどの版がどの版から影響を受けたとは言えない。

7. No.90、No.97、No.104、No.106の例から、新しく考案された指使いにより、その練習曲の曲想や練習課題を変えてしまう場合もあれば、より曲想に応じた演奏が出来る場合もあり、ひとつの楽譜に示される指使いが常に正しいとは限らない。

本論で得た結論は以上の通りである。なお、①奥版と②萩原版の間に出版された楽譜が存在し、入手できた場合や、その他の資料が入手できた場合には、また違う結論が出る可能性があることは付け加えておかなければならない。

日本で出版されている多くの版はⅢ.Peters 版の復刻と言われているが、指使いについて考察した結果、完全に踏襲されている訳ではないことがわかった。それぞれの校訂者は、学習者にとってわかりやすいものにするために、様々な改良を行っている。指使い一覧表からわかるように、バイエル自身が指示した指使いは省略されている場合が多く、学習者にとってわかりやすいものではない。逆に⑪木村版のように、すべての音符に指使いが指示されていると、指使いを見てしまうことで、音符を覚えることが出来ない、という別の問題も発生する。結局のところ、どの楽譜を用いるかという事よりも、どう用いるかの方が重要なのである。

筆者の経験からすると、学習者は各々が持つ『バイエル』に指示されている指使いを完全に守って練習してくる訳ではない。5度音程で弾ける練習曲の場合は、正しい指のポジションを身につけるために楽譜通りに練習する必要がある。しかしながら、5度音程では弾くことができなくなる練習曲で指使いの選択が必要となってくる。練習曲によっては、楽譜に指示されている指使いで弾いているかどうかが問題なのではなく、その音型と、学習者の手に合わせた指使いの選択が必要なのではないだろうか。例えば、スケールの練習における第1指がくぐり抜ける場所を知る練習であれば、楽譜通りでなければならない。しかし、No.80の半音階の練習で、第1指と第3指の組み合わせを無意識に使ったとしてもそれは問題ではない。またNo.104の指使いを、今は絶版になってしまった⑥全音版Aと同じように弾いたとしても、やはり間違いではないのだ。最終的には学習者の手と、教える側の教師の目が指使いを決定する場合があると言っても過言ではない。教則本だからといって、完全に楽譜通りの指使いで弾く必要はなく、その音型と自らの手や指に応じた指使いの選択が重要なのである。

本論では指使いのみに限定して考察したが、様々な楽譜を入手し、比較していく中で、音価やスラーなどにおいても多くの違いがある事が判明している。今後の課題は、指使い以外の要素についても比較検討し、現在日本で出版されている『バイエル』について、その変遷と系譜を明らかにしていくことである。

（ただ　じゅんいち　本学非常勤講師）

【謝辞】

資料収集に関しては、東京芸術大学付属図書館、国立国会図書館、本学図書館にお世話になりました。また田嶋喜子先生からは貴重な資料を提供していただきました。戦後のピアノ教育の状況と『バイエル』の使用については、恩師である藤井美津子先生、音楽之友社の亀田氏から貴重なお話を伺うことができ、前田則子奈良教育大学准教授からは、本論執筆へのアドバイスをいただきました。矢野孝始氏は一覧表のダブルチェックなど、常に私の研究を支えてくれています。この場をお借りして皆様に感謝申し上げます。大変にありがとうございました。

【注】

(Endnotes)

1 タイトルは版によって様々であるが、ここでは一時的に、一般的に用いられることの多いタイトルを用いた。

2 Luther Whiting Mason(1818-1896)　1880年から1882年にかけてニュー・イングランド音楽院から派遣され、音楽取調掛雇用外国人教師として西洋音楽教育を行った。

3 森山伸・岸啓子・横山詔八、2003、「ピアノ・エチュードの体系的研究　バイエルの研究（1)」、『愛媛大学教育実践センター紀要』、No.21、pp.49-66、愛媛大学教育実践センター。様々な分析を基に、練習体系としての意義や合理・不合理が考察されている。

4 ショパン作曲《エチュード op.10》の指使い研究に関する詳細は、前田則子・多田純一、2007、「ショパン作曲《Etude op.10》における指使いの変遷－ショパンの自筆譜から現代のエディションまで－」、『奈良教育大学紀要第56巻第1号』、pp.147-162、奈良教育大学、および、多田純一、2007、「エディションの歴史に見るコルトー版の指使い～ショパン作曲《エチュード op.10 No.2》の場合～」、『2007年度研究レポート』、全日本ピアノ指導者協会、http://www.piano.or.jp/seminar/thesis/report/tada.html を参照されたい。

5 印刷の際に、金属の版に対して出版社ごとの識別の番号が彫られていた。

6 ホームページのアドレスは http://www.hofmeister.rhul.ac.uk/cocoon/hofmeister/index.html

7 Beyer, Ferdinand, 1850 or 1851, 'ÉCOLE Préliminaire de Piano a ĺusage exclusive des Eléves de ĺage le plus tendre ET DÉDIÉE AUX MÈRES DE FAMILLE Contenant les Principes de la Musique et 106 Exemples, Etudes, Exercices Gammes et petits Morceaux PAR FERD, BEYER Op.101' ,Mayence, B.Schott

8 Praeger 版の指使いについては、指使い一覧表では現代表記の指使い番号になおして記した。

9 乙骨版の編集者は「編者のことば」の中で、この版を1860年頃出版としている。

10 現在入手できる日本の版の多くが、サブタイトルにこの 'Vorschule im Klavierspiel' を書き添えている。

11 本論では校訂者の名前が記載されている場合には、校訂者名を、ない場合には出版社名を略語に含んだが、Ruthardt 校訂版に関しては Peters 社の社名の方が一般に知られているため、あえて社名で示した。

12 高橋淳、1989、『正しい楽譜の選び方』、pp.71-72、春秋社

13 高橋、前掲書、pp.74-76

14 近藤久美、1995、「初心者向けピアノ教本についての研究 (1)-「バイエルピアノ教則本」の場合」、『一宮女子短期大学紀要』、第34号、p.177、一宮女子短期大学

15 これらの練習曲が始まる前の導入部に関しては、版によって省略しているものもあれば、説明を増やしているものもある。また、練習曲の番号についても No.1 から No.106 まで曲数は同じでも、曲順が若干違っている場合が多い。本論では各版において、原著に示される練習曲と同じ練習曲を探し出し、原著の番号として考察した。

16 寺西昭子、1980、『バイエル・ピアノ教則本』、p.57、カワイ出版

17 萩原英一、1924年、『バイエルピアノ教則本』、p.85、共益商社書店

18 高折宮次・平田義宗、1928年、『バイエル新教則本』、p.72、ピアノ専門學院

19 乙骨三郎、1935年、『バイエルピアノ教則本』、p.66、シンキヤウ社

20 『標準バイエルピアノ教則本』、1955、p.61、全音楽譜出版社

21 Beyer、前掲書、p.58

【参考文献】

井口基成、1955、『上達のためのピアノ奏法の段階』、音楽之友社

柏瀬愛顧・牛田幸子、1986、「ピアノ教則本『バイエル』について　分析とその活用」、『名古屋女子大学紀要』、第32号、pp.217-229、名古屋女子大学

近藤久美、1995、「初心者向けピアノ教本についての研究(1)-「バイエルピアノ教則本」の場合」、『一宮女子短期大学紀要』、第34号、pp.174-189、一宮女子短期大学
久野以早夫、2002、「保育士に求められる音楽の技術を養う『バイエル・ピアノ教則本』を通して“早くピアノが上手になりたい”」、『一宮女子短期大学研究報告』、第41号、pp.231-242、一宮女子短期大学
三木孝子・三木康子、2006、「初歩者のためのピアノ教本に関する一考察 - バイエルピアノ教則本のリズム分析を通して -」、『総合教育センター紀要』、第4号、pp.1-15、天理大学人間学部
三木康子、2006、「『バイエルピアノ教則本』にみられる奏法指導の特徴」、『音楽教育実践ジャーナル』、Vol.3 no.2、pp.104-109、日本音楽教育学会
森山伸・岸啓子・横山詔八、2003、「ピアノ・エチュードの体系的研究　バイエルの研究（1）」『愛媛大学教育実践センター紀要』、No.21、pp.49-66、愛媛大学教育実践センター
西村和子、1981、「バイエルピアノ教則本についての一考察」、『山口女子大学研究報告』、第7号、pp.63-76、山口女子大学
小野亮祐、2006、「ピアノ教材の成立に関する歴史的一考察2　バイエルに含まれる『番外練習曲』を例に」、『教材学研究』、第17巻、pp.221-224、日本教材学会
大宮真琴、1994、『ピアノの歴史』、音楽之友社
大地宏子、2001、「戦前の教本に見る日本のピアノ教育の一側面 - 打鍵表象の問題を中心に -」、『国際文化学』、第5号、神戸大学国際文化学会
下山望、1986、『ピアノ運指法　譜例分析による』、ムジカノーヴァ
城戸透・森山伸・岸啓子・横山詔八、2003、「ピアノ・エチュードの体系的研究Ⅱ　バイエルの研究(2)」、『愛媛大学教育学部紀要』、第50巻第1号、pp.110-138、愛媛大学教育学部
高橋淳、1989、『正しい楽譜の選び方』、春秋社
富田英子、2000、「導入期のピアノ教材について - バイエル教則本の分析を通して -」、『京都文教短期大学研究紀要』、第39巻、pp.107-115、京都文教短期大学

譜例に用いた楽譜は、ショット・ミュージック株式会社の許諾を得て、原著である‘École Préliminaire de Piano’から転載した。

# A Study of Fingering and the Alterations of 'École Préliminaire de Piano op.101' Composed by F.Beyer

Junichi Tada*

**Abstract**

The aim of this paper is to define the alterations of the fingering of 'Elementary Instruction Book for the Pianoforte' by F. Beyer, and to consider the fingering in Japanese editions. The most popular book for learners in Japan, 'Elementary Instruction Book for the Pianoforte', was brought by L. W. Mason from the United States in 1880. Then it has been published by many publishers and editors. We can find differences of fingering in some pieces.

As a result of consideration, we can find a lot of fingering has been added into later editions comparing with the first edition. Especially, many Japanese editions are influenced by Peters edition. In addition Japanese editors added some fingering. The fingering that is indicated in each edition is not only concerned with the subject of exercise but also with the view of music itself. Students and piano teachers have to choose the fingering that adapts to the subject, their own hands and fingers.

Keywords : piano, fingering, Beyer, op.101, first edition

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address:
〒590-0014 2-8 Tadei-cho,Sakai-Ku,Sakai City,Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Care and Welfare
E-mail: op.23.60@samba.ocn.ne.jp